

マリの歴史と社会におけるトゥアレグ人の位置 ——生態学的適応・生業分化・人種的表象——

南山大学人文学部教授 坂井信三

はじめに

西アフリカ内陸地方は、サハラからサヘル、サバンナへという生態学的な移行地帯にまたがっており、そのために生業形態や社会・文化においても多様な集団が分化している。一方この地域は、自然人類学的いうとコーカソイドとネグロイドの移行地帯でもある。

現在マリでおこっている政治的混乱とそれに関連する言説には人種的表象が錯綜した形に関わっている。人種的表象は、錯綜した政治的事態を単純化して見せるだけに、かえって解決困難な事態を生みかねない。この発表では、生態学的適応・生業分化・人種的表象の観点から、トゥアレグとよばれる人々が、かつてどのような位置にあったのか/いまあるのか、整理してみたい。

1. ニジェール川流域の生態条件と生業形態

(1) サハラとサヘル

ニジェール川「大湾曲部」の北岸は年間降雨量 200 ミリ以下の砂漠だが、サハラ側から合流してくる古い河谷があり、南岸グルマの乾燥したステップ（降雨量 300~500 ミリ）とともに、牧畜民 Tuareg の移牧域をなしてきた（Gallais 1975）。サヘル気候帯でも水の供給があるところでは農耕も可能で、Songhai 人の農民は氾濫原を利用して水稻耕作をする。他方グルマでは、トゥアレグ社会の下層民として農耕に従事する Iklan（ソンガイ語で Bellah）とよばれる人々の人口が多い（Gallais 1975）。

(2) 内陸デルタ

大湾曲部の上流（南）側にある大氾濫原「内陸デルタ」の降雨量は 300~600 ミリだが、年間をとおして完全に乾燥してしまうことがない。内陸デルタには、多様な水圏学的条件と土壌の分化があり、川、沼、湖の水産資源を利用する漁民、水運に従事する職能民、湿原と乾燥陸地を利用する農民、渇水期の草原を利用する牛牧畜民が生態学的ニッチを分け合っている（Gallais 1967, McIntosh 1988, 坂井 2003）。生態学的ニッチの分化が貧弱なサハラとサヘル住民にとって、生産力の高い内陸デルタは欠くことのできない生活物資の供給源となってきた。

(3) 交通手段としてのニジェール川とサハラ

ニジェール川の水運は、古くから北の砂漠と南のサバンナをつなぐ交易を展開させた。そのサバンナ側の集積地が内陸デルタの Jenne、砂漠側の集積地が大湾曲部の Tombuktu である。トンブクトゥからは古河谷をたどるサハラ越えの交易路があり、トゥアレグの牧畜民がラクダを使って輸送をつかさどってきた。

ジェンネとトンブクトゥは 13 世紀以来西アフリカの文明の中心都市だったが、植民地化以降交通手段がトラック輸送に移り、サハラ交易が意義を失ったために、現在では観光以外に産業がなくなっている。ニジェール川を南北に結んだかつての水上輸送に代わって、今日ではグルマを東西に横断する幹線道路がトラック輸送の中軸となっている。

2. 地域社会の構造

生態学的なニッチに富む内陸デルタでは、豊かな資源を多様な方法で利用する諸集団が相互の間に水平的な交換関係を結ぶことによって、諸集団の自律性と相互依存性を両立させた地域社会が編成されている。それに対してニッチ分化に貧しいサヘルとサハラでは、乏しい資源をめぐる地域社会の編成に政治経済的支配構造が目立っている。

トゥアレグ人社会はとくに強い階層制をもち、最上位には戦士貴族、次に自由身分のイスラーム宗教職能者と家畜飼育者、その下に手工芸職人、そして最下層に奴隷が位置づけられていた。この階層制は遊動性の程度と深く関係している。すなわち広大な移牧域をコントロールする手段をもつ戦士貴族が、砂漠辺縁の牧畜生活に不可欠の物資を生産する都市や農耕集落の定住民を支配下に取り込むという構図である。戦士貴族層は、遊動生活をしながら都市に対して強い影響力を行使し、サハラ越え交易を支配することもできた。

3. 二元化された表象

砂漠辺縁の集団間の関係は、自由身分 - 奴隷身分の表象をともなう垂直的な主 - 従関係として編成される。だがそれにくわえて、サハラ・サヘルは集団間関係は人種的表象によって二元化される傾向もあった。

(1) 人種的区分と地理的区分

サハラ・サヘル地帯は、イスラーム世界の人々にとって黒人アフリカ世界との接点だった。歴史的な地理文献では、ニジェール川を境にして北側を *bīdān* = 「白人」 = イスラームの領域、南側を *sūdān* = 「黒人」 = 異教(クフル)の領域とする認識枠組みがあった。

もっともその区分は歴史的に変動してきた。中世期にはスーダンの有力国家がイスラームを受容してイスラーム圏と認識されたため、サハラ・サヘルはベルベル人がスーダンに含められることもあった(Hall 2011)。ところが17世紀以降サヘルの大帝国が衰退し、サバンナの新興勢力がイスラームから離れていく時代になると、サハラ・サヘルは牧畜民諸集団は系譜操作によって自らにイスラームの宗教的権威を付与し、スーダン = 異教徒に対する優位を主張するようになる。17世紀以降、ビーダーン/スーダンの区分は、イスラーム/異教の対立の中で先鋭化していったといえよう。

(2) 地域社会内の系譜認識

地域社会内部にも人種的表象が別のかたちで存在していた。サハラ・サヘルは諸集団には、サバンナの人々との通婚によって肌の色が黒い人々が多く含まれるが、あくまで系譜上でビーダーンであることが重視される。トゥアレグの上位層にも、外見上は黒くてもアラブの *sharīf* など由緒あるビーダーンの系譜をもつ人々との通婚によって、かなり幅のある遺伝特性をもった者が帰属していた。すなわち社会的地位においては、肌の色ではなくあくまで系譜認識が重要だったのである(Hall 2005)。

(3) 「生物学的」人種観

ところが植民地化とともに、生物学的な特性と道徳的な特性をつき混ぜた近代的人種観が持ちこまれた。フランスの植民地支配は、その人種観をもとに住民を進化 = 文明と未開 = 野蛮の軸に沿って分類していった。このシステムにおいては、民族(*ethnie*)と人種(*race*)が同一視される結果、もともと多元的な構成をもつサハラ・サヘルの地域社会のカテゴリ

一区分との間に不一致が生じる。他方フランスは1905年に仏領西スーダンの奴隷制を廃止し奴隷解放を宣言したが、実質的な支配 従属関係は容易に変化しなかった。

結局こうした政策は、サハラ・サヘルの住民にとって一方では ethnicization (民族の人種化)によって地域社会の複合的な住民構成を「白人」(Blanc)と「黒人」(Noir)に分断し、他方では奴隷解放令によって地域社会の階層間にあった相互依存関係を否認するという事態を生んだ。とくにトゥアレグ社会の下層民 Iklan は、分類上「黒人」=Bellahとして「白人」=トゥアレグから分離されながら、社会的地位においては旧来の従属的立場を精算することができないという状況になった。他方植民地の生産構造は根本的に組み替えられ、サハラ越え交易は意義を失った。その結果、地域間の生態学的差異に立脚し、定住農耕と移牧、都市生活と移動生活の組み合わせによって編成されていたサハラ・サヘルの地域社会は内在的な構造契機を失い、エスニック化された諸集団のモザイクに転化してしまう。

このような文脈の中で、地域社会の住民区分は「白人」(Blanc) / 「黒人」(Noir)という人種主義的な表象によって再解釈される。フランスの植民地体制の初期には、ベルベル人=地中海人種一派であるトゥアレグ人は南仏ラングドックの住民と同質であって、「白人」の中でもアラブよりフランス文化になじみやすいという人種観があった(Hall 2011: 122-128)。これを引き継ぎながら、フランス人行政官はトゥアレグの地域社会を上位の「白人」(Blanc)と下位の「黒人」(Noir)に二分した(Lecocq 2005: 46)。ところが1940~50年代に独立を求めて活動したUS-RDA(Union Soudanaise – Rassemblement Démocratique Africain)は、同じ表象を逆向きに利用して、トゥアレグ=「白人」は「黒人」=南部マリの住民を略奪・奴隷化してきた圧制者だという言説を用い、トゥアレグの奴隷=ベラの解放を重要なキャンペーン・テーマとして位置づけた(Lecocq 2005: 48-53)。

独立後のトゥアレグ人の反乱に際してもこうした人種的表象はくり返し持ち出された。とくに1990年代の反乱において、国軍と連携してソンガイ人を主体に組織された自警団Ganda Koyは、その目的として、定住農耕民をかつての主人から守ると同時に、「白人のノマド」をソンガイ人の土地から追い出すことを標榜してはばからなかった(Lecocq 2005: 59-62)。今回の紛争でも、同様の人種主義的な構図が再燃していることがうかがえる。

(4) ビーダーンのイメージの変化

一方、宗教的含意をもつビーダーン/スーダーンの区分は、イスラーム主義者の流入という今回の事態の中でどう変化しているだろうか。現状の把握は困難だがトゥアレグのイスラーム職能者集団Kel es-Sūqの最近の動きについて、興味深い報告がある(Scheele 2013)。

それによると、Kel es-Sūqの中でもシャリーフの系譜を誇る最上位の人々は、植民地化以後早くからサハラを離れて都市部で起業家として成功した者が多い。今日その子孫たちは、サハラの生活様式とアラビア語を失い、裕福な都市生活者になって地位の高いソンガイ人と通婚し、はっきりした「白人」的外観をもたないことも多い。

今日衛星放送が普及する中で、中東アラブのムスリムを頻繁に見るようになったマリの一般の人々にとっては、そのような上層の者たちは「ビーダーン」のイメージから外れている。他方、サハラに残った中層以下の人々は内婚のために「人種的に純血」で、しかもアラビア語しか話さない。1990年代には、アルジェリアから流入したイスラーム主義者たちがそうした中・下層の人々の子女と通婚し、長く政治経済的利益を独占してきた上層のシャリーフに対する不満を改革主義に媒介することもあったという(Scheele 2013: 174)。

おわりに

生態学な移行地帯をなすマリ北部では、生業分化した集団が相互依存的な社会関係を結んで地域社会を編成してきた。しかし植民地化以後の変化の中で、トゥアレグの社会は奴隷解放と地域社会のエスニック化によって定着農民に依存した食料の生産基盤を失い、西アフリカの世界経済への組み込みによってサハラ越え交易による収入も失った。その結果彼らの中からは、さまざまな形でアルジェリアやリビアに流出したり、最近ではサハラを舞台に薬物密輸や人身売買、身代金目的の人質誘拐などの非合法活動に手を出す者も出た。マリ市民として生活基盤をもつトゥアレグ人ももちろん多い中で、そうした人々によるトゥアレグの分離独立運動は、マリ国民の理解をとうてい得られるものではない。

一方人種的な表象に関していうなら、今日の状況でトゥアレグ人が「白人」(Blanc)の表象を表立って利用することは考えにくいだろう。だが「ビーダーン」の表象がイスラーム改革の文脈で持ち出されることがないとはいえないかもしれない。中東から流入してくるグローバル化したイスラーム過激主義がマリの社会に入り込んでくる経路の一つとして、「ビーダーン」の表象には今後も注意しておかなければならないだろう。

文献

- Gallais, Jean 1967 *Delta intérieur du Niger ; Etude géographique régionale* , tome 1 and 2, Dakar, IFAN.
- 1975 *Pasteurs et Paysans du Gourma; la condition sahélienne*, CNRS.
- Hall, Bruce F. 2005 The Question of “Race” in Pre-colonial Southern Sahara, *Journal of North African Studies*, 10,- 3/4, 339-367.
- 2011 *A History of Race in Muslim West Africa, 1600-1960*, Cambridge University Press.
- Lecocq, Baz 2005 The Bellah Question: Slave Emancipation, Race, and Social Categories in Late Twentieth-Century Northern Mali, *Canadian Journal of African Studies*, 39-1, 42-68.
- McIntosh, R. James 1988 *The Peoples of the Middle Niger*, Oxford, Blackwell Publishers.
- Pelckmans, Lotte 2012 ‘Having a Road’; Social and Spatial Mobility of Persons of Slaves and Mixed Descent in Post-Independence Central Mali, *Journal of African History*, 53, 235-255.
- 坂井信三 2003 『イスラームと商業の歴史人類学 - 西アフリカの交易と知識のネットワーク』、世界思想社。
- Sheele, Judith 2013 A Pilgrimage to Arawan; Religious legitimacy, status, and ownership in Timbuktu, *American Ethnologist*, 40-1, 165-181.